

中華民国初期の社会思想と社会運動の興隆 ——青年知識人の中国社会批判を中心として——

永見 和子

広島大学大学院総合科学研究科

The Rise of the Social Thought and Social Movement in the Early Period of “Republic of China”: Focus on the Criticism of Young Intellectuals about Chinese Society

Kazuko NAGAMI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

1 問題の所在

1910年代後半から1920年代前半において、北京大学を拠点に展開した新文化運動は、倫理の覚悟こそ「我等最後の覚悟（陳独秀）」という自覚から、中国における近代的な精神革命の実現を目指して取り組まれた。それは、清朝のもとでの戊戌改革運動から、中華民国を生み出した辛亥革命の政治変革とその失敗を受けて、西洋科学思想を取り入れて思想革新を実現するとともに、新しい社会的要素として近代化した知識青年層を誕生させた。

これらの青年知識人は、伝統的学術の世界から抜け出たばかりながら、新文化運動の思想的影響を受けて個人主義的な自覚に進み、個性の発露を阻んでいる中国の現実を直視し、そこに西洋とは異なる未だ「宗法社会」時代から抜け出していない社会を「発見」した。彼らは、中国人は、バラバラの「群衆」に過ぎないという厳しく、深化した社会認識を持つようになった。

彼らが中国社会を認識する際思想的基礎としたのは、清末に紹介されて以来、当時の中国社会に広く普及していた社会進化論や社会有機体理論で

ある。第1次世界大戦終結後は、戦後の世界の大幅変動を受けて当時の世界の社会革命の思潮も中国に流入した。新文化運動における伝統社会批判は、やがて「中国社会をどう見るか」という問題意識を生み、社会改革の課題に転化していった。

第1次世界大戦中から対華21箇条要求など日本の中国進出が強化され、山東利権をめぐる中国が置かれた国際的危機を自覚した青年により1919年5月、五四運動が起こった。「中国社会は、宗法社会から未だ抜け出していない「群衆」に過ぎない」と批判を行っていた北京大学学生の傅斯年（1896-1950）は、これを見て、中国人は「社会的責任心」を自覚したと考えるようになり、中国に社会改革の時代が来たと考えた。

一方、「社会的責任心」の自覚の高まりを受けて、やがて、教育と実業を通じて「中国社会の変革」を担う運動が起こってきた。この課題を担ったのが、王光祈（1892-1936）や恽代英（1895-1931）ら青年知識人が組織した少年中国学会である。

本稿でとりあげる傅斯年、王光祈、恽代英の3人は、五四運動に参加したが、最終的には五四運動に対して批判的見解を抱き、新たな社会運動の

課題を模索していった。彼らは、中央・地方の青年知識人に対して中国社会の改革という課題を提起してゆくのである。

すなわち傅斯年は、五四運動後、故郷の山東省西北部の農村を回り、農村の実情を観察し、外国製品の流入や軍閥の跳梁で既に過去の中国の農村は崩壊状態に陥っていることを知った。農民の精神的荒廃は過去の宗教では救えない。遠からず農村は崩壊の危機を迎えるであろうと考えた。王光祈は、「予備功夫」という準備段階を設定して、いまだ「人」でない中国人を訓練して「人」にして、近代社会の構成員とすることができると考えた。恽代英は、倫理的自覚に立った「善勢力」の養成により、中国社会の中から自生的な改革の担い手を養成することを追求した。

本論文は、この時期、中国社会の内部に青年知識人が目を向けるようになったことのもつ歴史的画期性に注目し、彼ら3人の思想とその実践を具体的に検証することを目的としたものである。

2 新文化運動研究との関連について

「中華民国初期の社会思想と社会運動の興隆」という本論文のテーマと密接に関わって、近年、新文化運動・五四運動研究において、同時期の社会団体の動向や、これまで研究の対象とされることのなかった傅斯年・王光祈の研究が始められた。この研究動向を振り返れば、1970年代末に、新民主主義革命論に依拠した中国の「五四」観が否定されたのちに、1980年代に展開された啓蒙主義の立場にたつ思想研究、さらに90年代の愛国主義への揺れ戻しを経て、五四運動90周年の2009年前後に、新傾向の研究を生み出したといえる。すなわち、80年代の思想研究に対して、それが思想に特化しすぎたという楊念群の批判があり、社会に注目する研究が生まれた。それは、当時いたるところに、「社会」、「社会改革」、「社会運動」の言葉があふれていることを直視した結果であった。

本研究も、この新しい社会運動に注目した近年の研究の流れに位置している。筆者は、これらの先行研究にも学びながら、本論文では、かつては反共を理由に研究の対象とならなかった傅斯年

や、知識人の組織として否定的評価を受けてきた少年中国学会をとりあげた。具体的には、従来の研究では十分に触れられることのなかった傅斯年の新文化運動期における中国社会批判と社会改革論の分析、並びに少年中国学会における王光祈と恽代英の思想と社会運動論の分析を進め、彼らの知的営為の歴史的意義を問うた。

3 新文化運動期の社会思想と傅斯年の社会論

新文化運動は、辛亥革命前後の時期と異なり現実政治とのかかわりを拒否し、個人と社会の関係の中に問題を発見しようとしたところに特徴がある。傅斯年の社会論もこのような傾向の上に形成されたものであることをまず前提にしたい。

北京大学で発展したこの運動は、文学革命、倫理革命、専制批判、個人主義の提唱へと時系列的に進み、近代的な自我に目覚めた青年知識人を生み出した。その一人である傅斯年の社会論は、中国社会を「群衆」としてとらえる見方である。

その「群衆」論は、嚴復の「奇怪なるかな、中国社会は」という言を受け継ぎ、宗法社会の「群」は、原始人のような利己的な人間が機械的に結合する集団であり、中国社会には「バラバラ」な人間が存在するだけであるとみなした。そして、中国社会がこのようなバラバラの状態になったその根源を探究し、それは、長期の専制支配と科挙による思想的文化的支配の結果であり、中華民国の現在に至ってもこの専制支配の結果が社会を支配していると考えた。彼は中国社会が政治的統一性を一応保ちながらも、社会内部では人々は生活上の安定性を欠き、めちゃくちゃな状態であると考えた。

傅斯年が五四運動に参加した民衆の中に発見したと考えた「社会的責任心」とは、彼が古代ギリシャ・ローマの時代からヨーロッパに伝えられてきたというポリス国家の「自由の伝統」を研究した結果、形成した見方である。「社会的責任心」は、中国が近代社会に成長する上で欠かすことのできない人々の社会的な関心を指していた。

傅斯年の中国社会改革の提言は「無から社会を作る」という「造社会」論であった。彼が描いた

中国の変革論は、現在の社会の無い状態から細かな新しい団結をつくり、この新しい団結の中で形成した社会的倫理を以て散漫な中華民国を粘着させ大きな国民の団結を作り上げるというものである。

枠組みだけあって、中は空っぽな現在の中国社会を強固で充実したものに造り上げ国民の大組織にすること、国際社会において対等・友好的な関係をつくること、そして国内的にも国際的にもこの事業の責任と任務を受け持つのは青年であると、傅斯年は中国国内の青年たちに呼びかけた。この「無から有を生む」という「造社会」論は、理念を明示したもので、政治理論ではなかった。民衆の中に「社会的責任心」の誕生を発見したことは、彼ら民衆が、さらに国民として政治的に自覚してゆくことを展望するものであった。

4 社会運動の興隆

つづいて、五四運動が終結した1919年6月28日の直後、7月1日に成立した少年中国学会とその指導者である王光祈の少年中国主義をとり上げた。少年中国学会は、前年の1918年6月に、四川省出身の青年と日中軍事協定に反対して帰国した同省出身の留日学生に加え李大釗により発起され、当初は、個人の修養と学術を中心とした団体で、士大夫の組織即ち学会の流れをくんでいた。

しかし、その準備の過程で会員は、新文化運動や世界の新思想の影響も受け、五四運動に参加し、五四運動直後の成立大会で新綱領を定めた。これにより少年中国学会は極めて実践的な社会運動を目指す青年組織に転換し、五四運動後の全国各地の青年指導者を結集させる団体に成長したのである。

王光祈が、少年中国主義を唱えて運動をけん引した少年中国学会は、極めて個人主義的であり、政治活動をしない、他団体から資金援助は受けないなど、自立的団体であった。しかし、その個人主義的性格が運動体としての成長を妨げ、組織の分裂へ進んだ。

5 王光祈と惲代英

「科学的精神をもとに、社会運動を行い、少年

中国をつくる」という少年中国学会の綱領に最も忠実であった王光祈と惲代英が、やがてその進路を異にすることになる。王の個人主義的生き方に対して、惲は青年の生活問題に取組み、「委曲求全」のやり方で、現実に適応した運動を提起する。2人の論争の背景には、集団主義の勃興がみられた。惲代英が集団主義的方向に向かった背景には、地方の郷紳勢力との対決、地方都市での文化運動の行きづまり、共産主義勢力からの批判があった。一方、王光祈は、政治活動反対を堅持し、社会活動により中国社会を改革する路線に固執し、国内会員から孤立した状況に陥った。しかし、民族主義の方針を採ることに於いては、国内会員と同じ立場に立った。

6 新文化運動の再考のために

傅斯年と王光祈、惲代英の3人の思想には相違点もあったが、ともに極めて強い個人主義的要素を持っていた。個人主義を特徴としていた彼らにより、社会と個人の対立が明らかになり、社会運動の発展により新文化運動とそれに続く時代を新しく切り開くことができたが、青年知識人は、社会的勢力としては弱体であった。

傅斯年、王光祈はヨーロッパ留学で、中国の現実から離れ、学術研究へ移った。一方、惲代英は、彼の仲間とともに郷村運動に新たな進路を開拓しようとしたが、地方権力者に阻まれた。五四運動後の3人の進路を例に、青年知識人の1920年代の在り方を見ると、彼らの困難な道程は明らかである。しかし1940年代の傅斯年の議論を勘案すると、従来の学界における思想に特化した解釈とは異なる、民国初期の社会思想と社会運動の双方にアプローチすることが必要である。すなわち新文化運動を通じて中国では「社会的責任心」が育まれ、主権者として政治に責任を負うことを自らの課題とする人々が形成されてきたのである。中国の未来を切り開く社会層が現れてきたことが、近代中国の大きな変動を生み出す力となったことは疑問の余地がないと思われる。